様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：２０１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３３７８

研究課題名（和文）陽明学派の三教合一思想と皇帝政治

研究課題名（英文）Three Teachings Syncretism of the School of Wang Yangming and Ming Politics

研究代表者
岩本　真利絵（Iwamoto, Marie）

釧路公立大学・経済学部・准教授

研究者番号：５０８２３２２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では明王朝の建国者・太祖洪武帝朱元璋の文集『御製文集』が明代後期に何度も出版された政治的背景を明らかにするため、各版本の出版の背景や関係者の政治的立場を分析した。その結果、当初想定していた陽明学派とのつながりや皇帝の宗教に対する姿勢だけにはとどまらない、出版地域の政治状況、政争における官僚個人の立場、想像上の太祖の政治に込められた独自思想の展開など明代後期の政治史・思想史の多様な側面と『御製文集』出版事業が関係することが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
朱元璋の文集『御製文集』については、中国でも最近になって版本整理や出版背景の検討がにわかにさかんになった。しかし、中国の研究は日本に現存する版本を視野に入れておらず、また史料読解にもいくつもの問題を抱えたまま研究が進められている。本研究は日本・中国・台湾に所蔵される版本をすべて視野に入れて論じ、史料や先行研究を精読し直すことで、他の研究が見過ごしてきた『御製文集』編纂事業の背景を明らかにし、初代皇帝の存在が明代後期の政治にどのように作用していたのかをより正確にとらえることを目指す。そのことは皇帝政治が中国の思想の潮流にどのような影響を与えていたのかを明らかにすることにつながる。

研究成果の概要（英文）：The Yuzhi wenji, the collected writings of the Hongwu Emperor (Zhu Yuanzhang), the founding emperor of the Ming dynasty, was published several times during the latter part of the Ming period, and in order to clarify the political background to its repeated publication, this research analyzed the background to the publication of each edition and the political positions of those involved. As a result, it was found that diverse aspects of the political and intellectual history of the latter part of the Ming period had bearings on the publication of the Yuzhi wenji, and these were not limited to the initially posited connections with the school of Wang Yangming and the emperor's stance towards religion, and also extended to the political situation in the places of publication, the positions of individual bureaucrats in political disputes, and developments in the distinctive ideas with which the imagined founding emperor's politics were informed.

研究分野：明代史

キーワード：御製文集　明朝史　太祖　朱元璋　洪武帝

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

中国明王朝の創設者太祖朱元璋は宗教結社の反乱に身を投じて皇帝位を獲得したという出自から、儒教の枠にとらわれない儒教・仏教・道教を混淆した三教合一思想を有していた。しかし、濱島敦俊『総管信仰』（2001）が指摘するように、明代前期の儒者たちは儒教的価値観により太祖の三教合一思想に関する記載を史料から抹消しようとし、明代前期から中期にかけての史料では太祖は儒教的価値観の体現者として記述される。しかし、明代後期に三教合一思想が流行するようになると、儒者の一派である陽明学の影響を受けた思想家たちが太祖を三教合一思想の集大成として尊崇するようになる。太祖と明代後期の三教合一思想の関連性については、酒井忠夫『中国善書の研究』（1960）以来、多くの研究者によって注目されてきたが、儒教的価値観の体現者から三教合一思想の集大成へという太祖のイメージの変容については、申請時点の先行研究では等閑視されていた。

２．研究の目的

研究代表者はこれまでに太祖を三教合一の集大成として宣揚していた明代後期の思想家管志道について研究を進めてきた。また、太祖の治世のイメージが後代になると時の皇帝の政治姿勢の如何に応じて変容していったことを指摘したこともある（『明代の専制政治』（2019））。したがって明代後期における三教合一思想に関する太祖のイメージの変容に関しても、明代後期の皇帝の政治姿勢と関連しているのではないかと想定され、その政治的背景の解明が重要となる。本研究では太祖の著作を集めた書籍『御製文集』出版事業について、出版の経緯、出版者たちの来歴と人脈、当時の政治との関連性を検討する。この研究により『御製文集』によってどのような太祖のイメージが作られ、どのように三教合一思想と結びついていったのか、そして朝廷の政策とどのように関連していたのかを明らかにする。

３．研究の方法

（１）関連研究の検討

本研究の研究期間中に郭嘉輝「法祖講学：明中後期《高皇帝御製文集》刊行及其意義」（2019）と李根利「明太祖文集版本源流考」（2022）という関連する論文が相次いで公刊された。郭論文は主に『御製文集』各版本の刊行者の政治的・思想的立場および万暦十年版本の成立と影響を論じた。李論文は各版本の書誌学的研究を行った。両研究は本研究が当初想定していた手法や内容と重なる面も多く、また、郭論文が明らかにした①嘉靖十四年版本は湛若水の影響を受けた人士により刊行された、②万暦十年版本の編纂者と三教合一の思想家には密接な交流が見られる、という点は研究代表者も同意する。しかし、①両研究は中国に現存する版本しか見ておらず日本で所蔵調査をしていない、②郭論文は三教合一思想に向かう歴史の流れのなかに諸版本を位置づけることを重視するあまり、李論文は中国所蔵の全版本を一つの論文の中ですべて概観しようとするあまり、個々の史料の精読が不足し誤解・誤読している部分が少なからずある、という欠点を持つ。そこで本研究は①日本国内の『御製文集』版本を調査する、②史料を精読し、三教合

一に向かう歴史の流れに枠組みを限定せずに史料に書かれている内容をもとに関連史料を集めることに重点を置き、『御製文集』諸版本の編纂を再検討した。

（２）版本調査

先行研究で取り上げられている『御製文集』の版本は七種類ある。明代前期に政府によって出版された版本（明初本）、明初本をもとに嘉靖八年に雲南で出版された版本（雲南本）、明初本・雲南本とは別系統で嘉靖十四年以前から存在していた版本（甲乙丙丁本）、雲南本と甲乙丙丁本をもとに嘉靖十四年に揚州で出版された版本（揚州本）、揚州本をもとに万暦十年に中都で出版された版本（中都本）、万暦二十五年に南京で出版された版本（南京本）である。また、嘉靖十五年頃に中央政府では歴代皇帝の文集の再編集が行われ、太祖の文集『御製集』が作成された。なお、これら諸版本に加えて、研究代表者は日本所蔵の版本を調査した結果、国立公文書館所蔵の「広東本」の存在を発見した。

（３）関連史料収集

2019 年度には南京本の特徴である彭友信説話の発祥地の湖南省に行き、地方志などを調査した。また、関西大学所蔵の揚州本を調査した。2020 年度以降は新型コロナウイルス流行により出張調査が実施できず、関連史料の収集は公刊された書籍の購入またはインターネット上で各所蔵機関により公開された画像が主となった。さらに、雑誌『中国史学』に学界動向の原稿を依頼されたことにより、そもそも太祖朱元璋が明代政治において尊崇されたのはなぜかという問題を考察する機会を得た。

４．研究成果

（１）初代皇帝・太祖の明朝政治に対する影響力

明王朝だけではなく歴代王朝で、王朝の祖先が作った制度は「祖宗の法」・「祖制」として尊重されていた。歴代王朝の祖先が作った制度は後世から選択的に解釈される「作られた制度」であったのに対し、明王朝の祖制は「作られた制度」であると同時に、太祖が意図的に自ら「作った」面もあることを特徴とする。「作られた制度」だけではなく「作った制度」であるという点が明王朝の皇帝政治の特色および明王朝の歴史における太祖の突出性の要因であると考えられる。

（２）雲南本の背景：編纂者と流伝

先行研究では雲南本は①編纂者は唐胄、②流通量はごく少数だった、と見なされている。しかし、雲南本の序文や関係者の経歴、さらに日本所蔵の版本を調査したところ、①編纂者は劉臬、②流通量の多少は不明ながら朝鮮に伝来して翻刻され、さらに日本に伝来した、ということが明らかになった。また、劉臬による編纂の背景には、当時の朝廷が推進していた全国の荘田整理の存在が想定できる。なお、上記の成果をまとめて、「嘉靖八年唐胄雲南刻本『高皇帝御製文集』の成立と流布」として発表してしまったが、雲南本の書名は『御製文集』であるため、「高皇帝」

の三文字を入れてしまったのは不適切であった。ここに訂正する。

（３）揚州本の背景：湛若水の政治的立場

先行研究の郭論文は揚州本出版者たちと湛若水のつながりを明らかにし、さらに湛若水が自らの思想を正当化するために著書『聖学格物通』に太祖の文章を大量に引用したことを指摘した。ここから湛若水の当時の政界における立場に関心を持ち関連研究を調べると、朱鴻林「明儒湛若水撰帝学用書《聖学格物通》的政治背景与内容特色」（1993）の見解が支配的であった。朱論文は、湛若水が嘉靖初年に提出した上奏は大礼の議と直接には関わらないものの、すべて時の内閣首輔・楊廷和の政策を支持するものであり、そのために大礼の議で楊廷和と対立した世宗の不興を買ったとしている。しかし、湛若水と大礼の議の関わりを調べたところ、①湛若水は大礼の議で直接的に世宗を批判する上奏をしている、②世宗による湛若水批判は勅撰書の筆致に誘導されたものであることが判明し、朱論文の理解が不正確であることが明確となった。揚州本が出版された嘉靖十四年当時の湛若水の政治的立場については、上記の研究成果をもとに今後改めて検討していく予定である。

（４）南京本の背景：彭友信説話の成立と意味

郭論文・李論文では独自性が乏しいとされる南京本であるが、巻二〇「詠虹霓」に彭友信に関する小字註がついているのが特徴である。調査した結果、①南京本の小字註は陳建『皇明通紀』巻八、洪武二十四年七月条の引用である、②彭友信説話の原型は『永楽大典』巻八二二「維揚志」＝『（宝祐）維揚志』に見られる、③彭友信説話の流布には嘉靖年間の同郷の歳貢生陳論が関与していた、④南京本の編纂者・楊起元は同時に刊行した『訓行録』でも彭友信に言及しており、太祖との邂逅で彭友信が大抜擢されたことは楊起元独自の三途併用論を主張するうえで重要な論点だった、ということが明らかになった。

（５）南京本後継本＝広東本の存在の発見

国立公文書館所蔵『高皇帝御製文集』請求番号 316-0062 および 015-0014 は、字体や誤字などから南京本を翻刻した書籍である。また、版心の刻工名から、この書籍は万暦二十年代〜三十年代の広東で刊行された可能性が高い。また、015-0014 には『皇明祖訓』などが附されているが、内容から馮応京『皇明経世実用編』と関係がある可能性が高い。広東本の書誌情報の詳細に関しては、2023 年度中に史料紹介として公刊することを目指している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岩本真利絵	４．巻 31
２．論文標題 作った祖制と作られた祖制―明代祖制研究概観―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中国史学	６．最初と最後の頁 119-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩本真利絵	４．巻 82-2
２．論文標題 大礼の議と勅撰書―『大礼纂要』・『明倫大典』における湛若水評価の違いをめぐって―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東洋史研究	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩本真利絵	４．巻 34
２．論文標題 万暦二十五年南京礼部刻本『高皇帝御製文集』と彭友信説話	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文・自然科学研究 ： 釧路公立大学紀要	６．最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩本真利絵	４．巻 33
２．論文標題 嘉靖八年唐冑雲南刻本『高皇帝御製文集』の成立と流布	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文・自然科学研究 ： 釧路公立大学紀要	６．最初と最後の頁 51-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関